

# 頑張る女性の伴走者

とみさわ 富沢 一誠

ZARDの坂井泉水さんが亡くなった、と聞いた時、信じられませんでした。なぜかという、「負けないで」など、「人生応援歌」で、聴き手に勇気と元気を与え続けてくれた、さわやかイメージの彼女は、死から最も近い存在だったからです。

テレビなど表に出ることはほとんどなく、どこか神秘的なベールに包まれてはいましたが、本質的には、彼女は聴き手に最も近いアーティストだった、と言っているでしょう。

1990年代の幕開け。それは好景気の一方で、東西ドイツの統一や湾岸戦争の勃発、ソビエト連邦の崩壊など、それまで想像も及ばなかった現実の出来事に、「世紀末」というキーワードが影を落とし、人々の心に一抹の不安を生じさせる時代でした。自分を奮い立たせるためには、現実を直視するしかない。そういった状況を反映するかのよう、KANの「愛は勝つ」、槇原敬之の「どんなときも」、大事MANブラザーズバンドの「それが大事」など、「人生応援歌」が次々とヒットしていました。ただそれらは男性アーティストが送り出すものが中心でした。そんな時に、ZARDの「負けないで」は

発売されたのです。

この作品について、15周年記念ベスト・アルバム「Golden Best」のライナーノーツで、坂井さん自身がこんなふう振り返っています。

「当時、何作かずっと恋愛の詞ばかり書いていたので、今度は違うタイプの詞も書きたいなと思っていた矢先に、このテンポ感のある曲を聴いて「応援歌っぽいな」ってす

ぐにイメージが湧いて一気に書き上げました」

彼女は夢を実現しようと頑張っていたころの自分を思い出して、背伸びすることなく自分の本音を素直に表現しました。「負けないで」というフレーズは、自分自身を鼓舞するメッセージでもあったのですが、彼女のこのメッセージが、同世代を中心とする女性たちの心情を代弁していたからこそ、たくさん聴き手

の心を奪ったのです。その結果、160万枚の大ヒット曲となったのです。これ以降、彼女の歌は立て続けにヒットを記録しました。

さわやかで透明感のあるポーカー。そのポーカーを生かしたポップで親しみやすいメロディー。そして、聴き手の心情を代弁した、等身大のメッセージ。これらが相乗効果を上げ、ZARDのポップスは、例えるなら、聴き手が最も欲していた「心のビタミン剤」ともいべき存在だったのでしょうか。

90年代は、頑張る女性が注目を浴びた時代。そんな女性たちにエールを送り、勇気を与えると共に、ZARDの歌は、癒し効果をも同時に与えていたのです。その意味では、ZARDは頑張る女性たちにとっての伴走者であり、その歌はまさに応援歌だったので

十数年前に、私がパーソナリティを務めるラジオ番組に出演してくれたことがありました。物静かで、決して口数の多い方ではなかったのですが、言葉を選びながら誠実に受け答えをしてくれました。斜に構えたり、スター然としたところがなく、本当に自然体という印象。その音楽が与えるイメージ通りの人柄でした。約15年にわたって日本ポップス界を疾走してきたわけですが、どうぞゆっくり休んでください。

(音楽評論家)

